るのに軍人が商人になつたり商人が官吏になつたり官吏が車夫になつたりするのは尙更不適當である。併し自分の性格はなかなか自分自身に觀察のつくものではない、親や敎師や友達にも充分意見を徵して見て熟考するがよい。一寸機用に繪を書く位なことで畵伯にならうと思つたり一寸聲がよい位なことで音樂家にならうと思つたり一寸算盤がうまい位なことで商業に從事しやうと思つたりするのは早計である。此點に於ては

子を知ることは親に若かず

で親に相談するが一番よろしい。けれども近頃は時勢も急轉することなり父兄も職業によつては忙しくて餘り多くその子に接觸し難いものすらあるから色々の點に於て自分に最同情のあつい敎師の指導を仰ぐのが最安穩である。朋友親戚も存外參考になるものだからよく聞いて見るがよい。著者なごは始終朋友や、親戚の意見を求めたものだ。

耳聽えのよい職業

今の青年は多く耳聽えのよい職業を好んで外交官にならうとか軍人にならうとか政治家法律家工場主と云ふやうな感覺のよいものばかりを好むやうであるが此位不健全な思想はない。ごの方面でも第一流になれる見込があるならそれはこにかく外交官試驗にアヤフヤで引つかゝつていつまでたつても本官になれないやうな凡くら頭では到底外交官志望は不適當だ。軍人にならうと云ふ彼等の頭には劍光帽影いかめしく金モール勳章燦として肥馬高く嘶き從卒に轡をこらせてクワツ〳〵と練つて行く將校だけが描かれて砲煙彈雨の中に双眼鏡をこつて戰況視察の刹那飛來した敵彈で胸部を擊たれて轉輾反側する瀕死の將校はちつとも描かれてない。日比谷の議事堂に立つて滔々數千言の長廣舌を振ふ某々代議士の得意なところだけが目に映つて選擧運動に狂奔して全財產を傾けつくし而もいざと云ふ間際たつた一票のことで落選した代議士の成り損ねや、

瀆職事件で獄舍の人となり淋しい暗室に呻吟せる某々氏の生活などはちつとも眼中にないからだ。何の職業だつて明るい方面ばかり、よい方面ばかり見るなら皆結構なものばかりであるが底には底があり裏には裏があつて仲々門外漢の預り知ることの出來ない特種の煩勞が存するものだ。一寸見や一寸聞きで職業を選擇することは寫眞の交換で結婚する以上に危險である。

時世の要求と自己の性格と衝突する時はどうするか

此は大に考ふべきことだ。誰の性格も皆時勢向こ云ふことはどうしても望まれない。現代の世相で云ふなら商工業中心の文明の世の中だから工科や商科に入ることは大へんよろしいけれど誰もがこんな學科に興味を持つこ云ふことは困難である。中には自分は哲學がやつて見たいこ思ふのもあらうし又文學がやつて見たいこ思ふ人もあらうし地理に歷史に博物に醫科にそれ〴〵志さうこする方面は違つてゐるに違ひない。サア此場合にどうするか。此場合には大抵親は時勢向のものをやれこ云ふし本人は自分の好きなものをやらうこ云ふのが普通のやうだが、どつちがよいこも惡いこも一概には速斷の出來ない問題だ。親の云ふのも一理なら子の云ふのも一理ある。併同じ本人の性格希望こ云つても其人が圖畫だけに特殊の腕があつて餘のことは目だつて落ちるこ云ふ風なのはたこひ時勢がどうあらうこも圖畫を習つて畫家になるがよいし、習字も圖畫も同じく九十點で理科は八十七點までこつてゐるこ云ふのなら理科は時勢向だからこ云つて本人の意志を曲げてでも理科を修めさせるがよし。それは特殊の人々によつて人々の判斷が大切で此點に於ても自分の先生について篤こ意見を糺すが一番得策である。

併しこんなに云ふこ凡ての人が大學に行くか高等專門學校に行くかのやうにあ

つて一般の人には緣が遠いと云ふ嫌がある。爾餘幾多の中級や低級の職業にしても自分の氣に喰はぬ戰業に從事すると云ふことは大抵の場合避けたがよい。又時勢に向かんやうな職業も能ふべくんば全然よすがよい。時勢に向かないなど云つても已に職業として存する以上社會に相當需要があればこそ存するのだからそんなに極端に全く身の立て樣がないやうな患はなからう。自分が好きで其方に志したのならば

好きこそ物の上手

で自然進步も早からうし需要も相當にあるであらう。唯それ自分の長上と意見が衝突したなりで自分勝手な職業に志ざすと云ふのはよくない、必ず親を納得させて我が思はくにするか、自分が意を曲げて親の意に從ふかどちらかに妥協の側を極めて結局は父母之を望み師長之を勸め我も亦之を企圖すと云ふ融合一致の立ち場から着々步武を進めて行くがよい。

職業に貴賤あり

職業に貴賤なしとはよく聽く詞であり亦それは眞理である。貴賤は人にあつて職業にはないのである。唯其職業に從事する人々の人格如何によつて高尙にもなれば野卑にもなると斯う云ふのであつて此は實に其通りではある。が併し已に其職業に伴ふ職業氣質が一定した今日矢張職業に貴賤なしとは云へないと思ふ。だから吾々も亦今日の青年子女の相談相手となつて君は車夫に志し給へ、君は幇間が可いでせう、君は踏切番が適任です、君は風呂屋の三助が向きですなどはどうしても謂はれない。況や我最愛の女學生に向つて藝娼妓も亦一個の貴重すべき職業だとはどうして云ひ得やう。職業に貴賤なしと云ふことはそれ等賤しむべき職業に從事せる人々が聞いては悅ぶ言ひ方ではあるがどうも自分は職業に貴賤ありと云ひたい。尤凡ての職業が一々階級的になつてゐて軍人よりは政治家が貴いとか政治家よりは大臣が尊いとか云ふのではない、或特殊

の職業のみについて云ふと職業に貴賤ありと謂ふのが正しいと云ふまでのことである。

外の方面はさておき今の自分はかう云ふことを考へるのである。同じ職業であり同じ公職であつても警察官は人の暗黒方面ばかりに拘はつて職務に忠實にすればする程人泣かせとなる。

然るに吾々の携はつてゐる教育は職務に忠實にすればする程人をも悅ばせ吾身も滿足させることが出來る、同じ職業をとるなら成るべくは斯う云ふ利己と利他との一致する職業を選んだ方がよいと。併此はホンの一例であつて警察官必らずしも教育家より品位が劣るわけではない、職業の欲目で云ふことである。併同じ職業を選ぶなら人の暗黒面をあばくやうなものは避けたい、人にも喜ばれ我身も發展して行くことの出來るやうなものを選ぶがよいと思ふ。此は余の一家言である。

勤勉

己に志を立てた以上それに向つて勇性邁進する必要がある。西洋では

日の照つてゐる中に枯草をつくれ

と云ひ、日本で

若い時の辛勞は買うてもせい

と云ふのは皆此適當な時に働けと云ふことを戒めたものである。手を懐にして左團扇で居てそれで事が成功しさうな筈がない。

朝に星を戴いて出で夕に月を踏んで歸る

と云ふ風に自己の職業を大事に勤めるならば其豫期通にならぬまでもより近い目的に到達することが出來る。印度や其他の熱帶地方では年に二度も收獲があるし、ヂツとしてゐて食物が得られるこころから土民は大抵遊蕩懶惰である。隨て文化の度もあまり進まず碌々として他人の頤使に應じて是命惟從うてゐる。

稼ぐに追ひつく貧乏なし

と云つて人間は勤勉でさへあれば食ふことに不自由するやうなことは無い筈である。假に現在から目的地までを百と度を盛れば勤勉な人は一年十の力を以て突進するのに對して怠惰なものは二を以て進む時には五も十も退くこともあるとする。前者は十年にして目的地に達し、後者は五十年にして尚目的地に達し兼ねる勘定である。余の現に居る宅の家主は赤手を以て起つて一代百餘萬圓を貯へた人であつて、余の借りて居る別莊以外に借屋を五六十軒も持ち地所も數十町歩持ち貸金も三十萬圓内外はいつもあると聞いてゐるがそれでゐて朝はいつでも四時より遲く起きたことがない。起きると直ぐにデスクの前に掛けて帳合をする。細君は手水をつかつて直ぐ附近の天神樣へ參る、女中は直ぐに竈の下をたきつける。近所にアート欠呻をして齒楊子をつかつてゐる時分にはもう半日分も仕事が出來てゐると云ふ此勤勉が今日あるを致した譯である。著者は

公務のあるからだだから此頃のやうな短日の時には日曜でなくては散髪は出來ない。朝四時に起きて一きり原稿を書いて新聞を見て朝飯を喰つて七時頃に町に出かけると同じやうな理髪師が二軒ある。先づ甲の家へ行つて見ると戸がしまつてゐる。しかたがない又乙の方へ行つて見ると起きて椅子の上を拂つてゐる。ヨシキタと云ふもんでそこへ這入る。甲は朝寢をしたばつかりで二十五錢の金を儲け損つたのである。

勤勉な人は顚んでもたゞでは起きぬし、坐つても何か考へてゐるし、停車場で汽車を待つ間にでも明日の段取を考へてゐるし、便所へ行つてゐる間にでも半日の豫算を立てるし、たゞの一時片時でも無爲で過すと云ふことはない。

朝行燈の下で飯を喰ふ人に貧乏なものはない

とは舊幕時代にあつた諺だが現代の人は少くとも電燈の下で朝飯を食ふやうにせなくちやならない。

一日ずつと此と云ふ仕事をするでもなし手を空しくしてアッチにトボンと立てりコッチにトボンと立てり、新聞の死亡廣告まで見て敷島を二箱もあけて欠伸の二十もしてゐる人は一見甚らくなやうにあつて實は甚退屈なものである仕事の嫌な人から觀ると『人間一代何もせずにヂッとして暮らせたらどんなに愉快にあらう』とも思はれやうがさて愈々『お前は何もせんでもよろしい、一代遊んで暮らせ』と云はれたら如何な遊びずきも困るだらう。仕事の忙しい辛抱は何でもなく出來るけれども仕事のない辛抱は誰も出來ない。勤勉は人間の天性である。世には自分の職務に對して甚冷淡で唯義理か役かにして、責めふさぎだけのことしかしない、出來るだけあぶらをこつてルーズなことをする程功經たことのやうに思つてしたり顔をする人があるけれどもその人はそのことつたあぶらを以て果して能く幾何のことを爲し得たかに想到すれば一本五厘の敷島を二本吸つた位のことである。斯して自己に於ては一錢を損し、公務に於

ては多大の損害を來し誠に道德的價値の少いことに終る。怠惰の報酬は大抵こんなものである。諺に

不精はこく程悲しい

と云ふ。針で推した程のことでも我手我足を動かすことを臆空がるものは愈々出でて愈々不如意となるものである。學生の靴の手入を見てゐると或ものは始終磨きづめであるから一朝にはホンの一寸輕く刷毛ですれば直ぐピカッと光るし或者は十日も廿日もひどいのは三十日も靴墨を塗つた事が無いものだからサア　天皇陛下の奉迎送だと云ふやうな場合となると大騒ぎにゴシ〳〵磨くかなか〳〵光は出て來ない。ノートの整理なんかでも手まめな學生はまるで整埋そのものに趣味を持つてゐるかの樣に綺麗に手入れしてゐるから見ても氣持がよい。イザ試驗となると待つてましたと云はぬばかりに悅んでそれを復習するが手まめにない學生は書いてあつたり書かなかつたり一枚は別の紙にあつたり支

離滅裂でイザ試驗と云ふ間際になると頭痛鉢卷でアッチを渉りコッチを探し友達に借りて寫して見たり教科書を出して引合はせて見たりと云ふ樣で實に見られたもんでない。それはまだ上等の方で、そんなことをする學生に限つてソンナ面倒なことはしない、友達のゐないまに机をあけてノートを盗みよみしたり試驗の場に公式ばかり拔萃して持つて行つてカンニングをしたりする。もう一つひどいのになるとソンナことをするのも面倒なと云ふので簡單に答紙に○を書いてサッサと澄まして出る。その結果は云はずと知れた不合格である。不精はこく程悲しいことはよくも云つたもんだ。

苟も一個の目的を立てゝそれに向つて突進しやうとするものは此勤勉の二字を忘れてはならない。此は登龍門をくぐる唯一の入場券であることを忘れてはならない、バラダイスの入口に横はる敷居であることを忘れてはならない。

節　儉

勤勉の後には節儉が伴はなくてはならない。いくら働いて儲けても始末が惡くてそれ以上に徒費するならば働きはのろくても始末のよい方がよい。今茲に一日五圓を儲ける人があるとする。五圓ならば吾國の中流生活が出來る。それだのにその人は酒を飲む煙草を吸ふ、肴か肉の氣なしには一日も居れない。そこの細君が又ズボラでバナゝの三百匁やそこらは一日に食つてしまふ、芝居は變り目毎に一つも外さない。何のことはない着道樂に喰ひ道樂に遊び道樂ときてゐるから一日六圓五十錢平均に費すとすると差引一圓五十錢のマイナスになつて月々四十五圓の缺損が行く。一方では又一日一圓しか儲けられないが大さうしまつをよくして八十五錢で一切の費用を支拂つて行くから一日には十五錢のプラスが出來て月四圓五十錢宛ためて行くとすると一年の後には五十圓あまりの貯蓄が出來る。十年もたてば此二人のプラスマイナスは大きな違ひになつて

來る。よけいに働くもの必らずしも餘裕のある生活をするものではないことがわかる。

儉約と吝嗇とは從兄弟似

儉約と吝嗇とは從兄弟位よく似てゐるが併兩者の間には大なる區別がある。大体から云ふと自分のことを始末するものが儉約で人のことまで始末するものが吝嗇だと云ふがあながちさうとも限らぬ。出すべき義理は缺さないで居つて物の締りのよいのが本當の儉約である。

食は飢ゑを凌げば足り衣は寒さを防げば足り居は膝を容るれば足る

と云ふのは生活の最低度を示したものでごうしても儉約しなければならぬ場合にはこゝまで標準をさげる必要もあらうが併世間の吝嗇家のやうに郵便切手の代まで値切らんばかりにケチにして家では爪に火をともし外では財布をあけることは絶對にしないで公共の事業には一錢の金も出すのを惜み、親類や知人がいくら難儀をしやうがそ知らぬ顔をして朝に夕に百圓紙幣をかぞへては樂み銀行の通や貸付證文を並べては樂み、和製のシャイロックのやうな顔をしてガミッイて人から人とも思はれず人を人とも思はず、人は人我は我で暮らして行くのもどんなものだらうか、人道上から見てあまり感じないではないか。金權萬能の時勢では或はそれでも且那々々と人が立てるかは知らぬが人間としてレッテルをつける時には三文の價値もない人である。

死に錢使ひ

別に誰を助けたと云ふ譯でもなく、別に公共の爲に義捐したと云ふでもなく、さりとて身のまはりのもので後に殘る品を買つたと云ふでもなく、何に消えたことはつきりわからないで居て始終足らん〳〵で暮らして行く人があつて世間で

之を死錢使ひと云ふ。金はもとより死物でごんなに使つて見たところが矢張死錢つかひには相違ないが、使ふ人の人格により上手下手によつて或は活きた金となり或は死んだ金となる。五圓のお金でもビヤホールに行つてビールの大コップを二杯あほつて二皿三皿料理を云ひつけて殘りは給仕にくれてやつたらそこ濟んだになつてしまふが、一尾の大鯛をこつて上等の酒を二合燗させて二三の菓物を買ひそへるやうにすれば家内みんながおいしく喰べられてお釣は澤山にあまつてかへる。否それよりも鮪か鰹か青魚位に止めておいて自分なり家族なりの不斷着でも買へば一冬も二冬も助かる譯だ。否それよりも憐れな夕刊賣の小供に遇ふ度毎に十錢宛わけてやれば五十人の難儀を助けて大へんな善慈家になれる譯だ。こんな風に金と云ふものは使ひ方一つでよくもわるくも費されるものだから餘程愼重に考へた上で財布の口をきるやうにせねばならぬ。

貯への善い人惡い人

人に貯への善い人もあり惡い人もある。惡い人になると何か物を手に入れたらそれが消費された形にならねば氣が濟まぬと云ふ風に直ぐ何かにしてしまふ。お金でも手に入つたら、物の一日と無事では居ない直ぐいろんなものを買つてしまふ。恥かしながら著者などその一人である。尤道樂はしないけれどもお金さへあれば直ぐ本屋へ走る、文具屋へ走る。差當りごうしても見なければならない書物でなくてもチャンと早手まはしにこつておく　本棚が一杯になつて積まれもしないのに金でおくより本でおく方が氣持がよい。こんな性分のものはいくら儲けたつて到底百萬長者にはなれない。反對に貯へのよい人は財布が輕くなると氣が氣でないやうに金を一杯にすることに骨を折る。そして一杯になつたら容易に口を切らない。品物を消費するにしても同樣である。だから一昨年お向ひの引越しに貰つた燐寸をやつと此頃取出して使ふ位なもので斯う云

ふ嗜みのよい人は一代物にも金にも不自由することはない。

江戸ッ兒は宵越しの金を使はぬ

その日に儲けてその日に遣うこと云ふたのは昔のことで今の江戸ッ兒はそんなことをしては到底安全な渡世が出來ない。人生が諸行無常な上に實業界も諸行無常なら公職方面も諸行無常でいつ何時不時の災難に出くはすやら何時不景氣の嵐が襲つてくるやら何時文官分限令によりこやつて免職の辭令が下るやらわからない。萬一の用意は誰しも具へておかねばならぬ。金は兵の戰に於ても生の戰に於ても唯一の軍用金である。文明をエキスにして懷裡に藏することの出來るものである。此さへあれば衣食住に事は缺かぬ。華族の令孃でも嫁にくる學士や博士杯も技師や顧問に傭うことが出來る。あらゆる最新式の文明的設備は思ふまゝに出來る。人々は是非とも身分相應の貯蓄をしなければならない。

知足安分

事足れば足るにまかせて事足らず
足らで事足る身こそ安けれ

人間贅澤を云へば際限のないもの、大抵のところで我を折つて分相應に安んずることが大事である。十錢の下駄を履いて五錢の鰯を食つて『マア此で結構』と滿足の出來る人は實に幸福である。一圓の下駄を履いて三十錢のさしみを喰つてもイヤ古いの新しいの、鼻緒の色が氣に喰はぬのと云ふ人は一生涯を不平不足でおし通さなくてはならぬ。分に安んずることは云ひ條自分の身分は此程と度をもる譯にも行かぬのだから先は分以下で安んじて居れば間違はない。一夏社會學の大家遠藤博士が余の鄕里へ講師としてこられた。一世に名たゝる大家ごんな立派な服を召してござることだらうと見てゐると詰襟のよごれはうけたやうな安服であつた。此を見た某訓導早速新調の脊廣を脱いで小倉の古服にかへ

たこ云ふ。遠藤博士が標準で小學校教員の身分が自覺されたからである。

帶革で成功した南區の某氏工場には澤山の工學士が傭つてあつて其等の技師は冬ならスチームの室、夏なら扇風機の横でなくては事務を執らないのに肝腎の主人公は白シャツ一枚になつて汗みづくで働いてゐる。傭主こ傭はれ主こまるで地位轉倒だこ云ふので心ある技師は又之に倣つて質素に勤勉に働いてゐるこ云ふ。此も其主人が身分の標準になつたわけである。

分不相應の暮らしは自分の懐がつらいばかりか他人の笑ひものこなつて二重に損害を招くこことになる。よしや他人が笑はないまでも世間は何も自分一人に注意を拂つてくれる義務はないのだから通りを歩いてても『アノ人は金の義齒が美しい』こも『アノ人はよい着物を着てゐる』こも褒めてくれる筈はなし、褒めてくれたこしてもソンナ名譽は爪の垢ほども價値のないものである。汽車の一等劇場の特等、茶代の大張込さう云ふこことは一時その場では華やかではあるが

これは必上流社會の人がすることだこ心をきめて假にもえらさうな眞似はせぬがよい。時折の流行スタイルを追ふこと女子は勿論男子も亦好むこころには相違ないが猫の眼よりもクル〳〵變る此の流行界にさう〳〵いつも當世はやりの風の出來る人間ばかりある筈はない。中折帽の緣があるこ云つて吐りに來るものもあるまいし、ダブリューのチョッキだからこ云つて怒りに來るものもあるまいし、金の指環をはめてゐないからこて不都合だこ立腹するものもあるまいし、簪の形が古いこ云つて憲法違反こ云ふ譯でもあるまいし、他人の迷惑にならぬこことならなるべく流行スタイルなごは追はぬがよい。今の世の物數奇な人は流行を追ふごころか流行の魁をして得意がつてゐる人もある。東京の某夫人なごは賴まれもせぬ新意匠の模樣を考案してそれで世に行はれたら賢い子供を五人も育てたやうに悅んでゐるこか。それも實際經濟的に出來て而も體裁のよいもので社會の實益を增すものならばこにかく、さもなくして自身流行の

魁をしたと云ふことだけに興味をもち滿足を見出すと云ふのは實に下らない虛榮の一種と謂ふべきである。又流行を追ふことが出來ないから流行に引きずられる程度で暮らさうと云ふ人があるが此もよくない。所謂引摺られるとは一年後れ二年後れで次々流行のレールを辿らうと云ふので、つまり緩い速度で流行を追はうと云ふわけである。スルト『アノ人が着かけたのだからモウ流行も廢つてゐる』と云ふわけで、まるでその人が流行の終りを宣告するやうな風になつて世間では目安が出來て結構だが、何もすき好んで流行後れの目安なんかになる必要はない。流行如何に拘らず自分にあつたものであまり突飛でないものを作つておくのが一番よい。そして大事に使つてゐるうちには『流行は繰返すものなり』でいつかまたそれが流行スタイルになることもあるし、よしそんなことにならぬ迄も自分の爲には最便利に出來てあるのだからそのものゝ壽命のある間思ふ存分に使用することが出來る。

見え坊即虛榮

ケチな人は有つても無いやうに見せかけるし、見え坊の人はなくても有るやうに見せかける。そこで十千萬兩もある家の旦那が木綿の羽織を着て素寒貧の一厘なしが縞紹の羽織を着ると云ふ妙なことになる。懷は火の車がまはつても無理算段をして、三越に行くやら高島屋に行くやら白木屋の番頭を呼ぶやらと云ふ始末で何のことはない針の座布團を敷いて花見をしてゐるやうなヒヤ〳〵した藝當を演じつゝ世を渡る。是即當今流行の惡德となつてゐる虛榮である。きいた風を見せ持つた風を見せることは一種の虛僞である。身分不相應の支出をすることは一種の不節約である。虛僞と不節約と二重に不德義なことをして金のない國がごこにあらうと云ふやうな風をして灯こもし頃になると横町の一六銀行や七ッ屋の門を潜つて『ごうぞ誰にも內證で』と拜むやうに頼んでゐるなご寧一種の喜劇である。見え坊の胡魔化しはさう永く續くものでない。一寸

電車の隣席、一寸列車で同じ箱、それ位な程度の同仲間は『ごんな立派な身分の人だらう』こ思はうが、それをのけたら外にこりえはちつこもない。まずい風でも懐の暖い方が風は引かぬ。懐が北海道で外ばかりが花の都では一行感心しない。禮儀作法に違はぬ以上は「知足安分知足安分」こ心得てゐるがよろしい。

見え坊の生の戰ひ振は後へ續く勇も無い癖に眞晝廣野に驅け出てサァこいこ相手に逼るやうなもので一寸見には如何にも勇者のやうにあるが二太刀三太刀かけ合つたら後は散々な敗北をすることは必定である。

驕るは易く締るは難し

前よかつたうちが身代限をして生活の程度を低めねばならぬこ云ふ時には大へんな苦痛で或は死ぬよりもつらからう。象牙の箸で榮耀の昔を思うて麥飯の上に涙をおこすやうなことは幾度あることかわからない。それこ反對にもこ貧しかつたものがお金が出來て生活の度を高める方は何こもなく易々こ出來る。こころが人生は生憎なものでサウ〳〵誰もかも、貧乏人が金持になるわけに行かぬが、金持が貧乏人になる例は隨分多い。して見れば始めから貧乏人のつもりで、つゝましやかに暮らすがよい。それでお金が出來て仕方がないこ云ふのなら世間爲すべきのことは幾らもある。

小成に安んずる勿れ

志を立てるなら大きく立てよこは昔からよく言ふ事である。毛利元就の從者が嚴島の明神に『どうぞ若君が末では中國の主になられまするやうに』こ祈つたら元就が『ナゼ日本全國の覇こなることを祈つてくれなかつた、棒程願うて針程かなうのが人の世の常であるものを』こ云つたこか。始めから出來る見込も

ない飛んでもない大きな望みを抱くことはよくないけれども確に實現の出來ることならなるべくは希望を大きくするがよい。『野心』と云ふと聞えがわるいやうだが人間は誰しも野心を持つべきものだ。野心の無い人は小成に安んずるの徒で例へば富士山を三合目位あがつて『あゝ眺望がよい、三國一の富士山だ』と云つて歸るやうなものだ。見てゐる範圍は極めて狹く、自身努力を拂へばマダまだ上へ登れるものを自ら足れりとして劃つてしまうのである。

一体に日本人は大器晩成と云ふ資に缺けてゐる。年齡五十才が活動盛りとする歐洲人に比べると十も二十も早く意氣が衰へて一定の地位にありついたら最後モウ努力をしやうとはしない。受驗前の教員に學力があり大學院時代の學士に學識があり大臣になるまでの次官にヤリテがありするのは此爲である。試驗の關門を通つた教員はモウヤレ〳〵と云つて勉强をしない。博士の肩書を贏ち得た大家は書齋よりは倶樂部的の室に多く閉ぢ込る。大臣になりすました人は存

外に惰氣が多い。否こんなごころでない、今時の學校卒業生の凡てが皆此型で卒業證書一枚さへ握れば天下最高の學識でも身につけたやうな顏をして又往日のノートを手に觸れもしない。高等專門學校や、大學でも卒業でもしやうものなら蟻が天下でも取つたやうな顏をしてゐる。ソシテ書生上りに似けなく社交が上手で社長や重役に『なか〳〵隅におけぬ』などひやかされて得意がつてゐるなご馬鹿の骨頂である。人間此世に生まれては能はぬまでも第一となる心掛がなくては駄目だ。車夫となつては天下第一の車夫たらんことを心がけ百姓となつては天下第一の百姓たらんことを心掛け官吏、軍人、醫者、教師何でも各自の方面に於て第一人者とならうと云ふ抱負がなくてはその人の智識なり技能はモウごん〳〵と退歩しかゝつてゐるのである。月半百にも足らぬ俸給取が一廉の成功者でゞもあるかのやうに紳士然としてゐるのを見ると著者は穴へも這入りたい程その人の爲に肩身

狹く思ふのである。大成功のバラダイスは尙幾里の奥にあるものを僅に枝城の一二を拔いて早や凱旋のシヤンパン酒をあふる連中は到底共に生の戰を語るに足りない。

正　直

いくら戰場でも卑劣な手段を以て勝を占るのはよくない。毒菓子や毒瓦斯で敵を苦しめてまでも勝たうと云ふのは單に不道德なばかりでなく國際公法の原則にも違反する。生の戰の勇士も亦此心掛が肝腎である。目ざす理想は三角形の頂點にある。辿るべき正路は其二邊にあつて他の一邊の弦は不正の道だと云ふのならば遠くとも二邊の路を辿るのが人道と云ふものだ。失禮ながら今の名たる富豪の中には此三角形の一邊を通つて公には云へない手段で巨萬の富を贏ち得た人も往々あるやうである。カンニングで入學試驗が受かつたり、情實で高

位高官に上つたり、不正手段を以て人の財物を獲得したりするのならせない方が遙にましだ。

自然はもとより誠であつて人間の性も亦始から僞のないものである。湯は之を電燈下で觸れても熱ければ之を黑暗に觸れても熱い。熱いと云ふのは湯の僞らない性質である。姓名を僞つて至る處で詐欺取財を働いてても突然人が『オイ三浦君』と呼べば一度は反射的に振り向いて『オイ』と云ふ。『コイツしまつた僕は今四浦と僞名して働いてゐるんだのに』と云ふ智慧は後でなくつちや出てこない。始に『オイ』と出たのが人間の性の僞るべからざるものであることを示してゐる。永い人間の一代に於ては一時的のごまかしと云ふものは何等の功を奏しない。それをきゝめがあるやうに考へてゐるものがあつたとしたら其人はまだ人間が充分出來てない證據である。殊に近頃社會百般の事柄は大抵皆信用を基礎にしてするものが多く信用の有無は非常にその事業の遲速や便不便に影響

するから生の戰が劇しくなればなるほど此正直と云ふことが大切な德となるわけだ。試に近頃商店や會社や銀行で人を傭う時の條件をしらべて見ると大ていは『何と云つても正直な人でなくちや困る』と云ふ。横着で事務に敏腕な人があつたとしても『そいつは危險だ』と云つて平に斷られる。そんな相當な地位でなくても矢張正直が第一條件であることは同じで呉服店の下足人や學校の校僕ですら不正直なものは傭はれない。

ワシントンが父の大切な鉢植を斧で切つて正直に自白して却つて父に悅ばれた話、松平丹後守の近習の小僧が秘藏の松の枝を折つて正直にお詫びをして却て二人扶持を增して貰つた話、森蘭丸が信長に侍してその爪を切られたのを拾つて九枚までさがしたがモウ一枚知れませぬと云うてそれから信長の信用が益々厚くなつたと云ふ話、中江藤樹の感化を受けた馬子が態々旅人の忘れて鞍にのこしておいた大金を正直に送り届けた話しなど古來正直で人の信用を得た佳

話はいくらもある。

日本の商人はとかく此正直と云ふ德にかけて

商ひと屏風は直ぐでは立たぬ

など云つてをつたが近頃は商業道德をやかましく言ふ先輩が增してだん〳〵改良されつゝあるのは結構である。見本には可いものを見せておいて現品はズツと品をおとしたり上にはよい炭を入れておいて中の方へは石や瓦を詰めたり、焙爐にかけぬ天道茶を輸出したり絲底の歪んだ湯呑をまぜたりする風のことが頻々あつたが今の商人はそんな横着なことはしない。横着をすれば自分に損だと知つてゐるからである。

所謂德望家とか、人格の高い人とか云ふ者は必誠實な人である。いくら敏腕な人でもいくら才幹に秀でゝゐてもそれは唯よく間に遇ふ人と云はれるだけで吾々は一向心服し兼ねるのである。口と心と行とが三つ三色になつてゐながら

口ばかり立派なことを云ふ人には心服し兼ねる。あまり物數は言はないでもコツ〳〵と忠實に働いてゐる人を尊敬する。

不言實行

と云ふ語がある。世の多くの人は此でよいのである。たまさか能辯の人があればしやべつてもよからうが、しやべりてが十人に動き手が一人となつては世の中は立ち行かぬ。

誠は又安心の道である。身正を踐むものは故なくして他から壓迫を受ける理由がない。王候の尊を以てするとも此種の人を恐れしむることは出來ない。近頃當所に浪花節芝居が流行してゐる。それを見て來た人の話に『賭博の宿をして十二三人も博奕をうつてゐる最中に電燈會社からやつてくるとテツキリそれを巡査と思ひ違ひして亭主はブル〳〵ふるへてゐる。こもかく見つかつては大變

と、十二三足の下駄を遮二無二懷へねぢこんで、サアおはいりやすと中へ入れる。『何燭光でしたか』と問ふと亭主頭を疊にすりつけてブル〳〵ふるへ聲で『職々々、職は大工で……』と云ふ時滿場はドッと笑ふ』とか。落武者は薄の穗にも驚く。身に咎あればこそ電燈會社からの使を巡査と思つたり下駄を十二三足も懷にねぢこんだりせなくちやならない。我身にかへりみて疚しいところが無ければ誰が來やうが一向平氣で『いらつしやい』とやつてをればよいのである。近頃後藤内相の詠だとして新聞に掲げられてゐた歌に

寢ざめよき事こそなさめ浪花津の
よしとあしとは云ふにまかせて

とあつた。所謂寢ざめのよいことゝは正直なことを云ふので寢覺の惡いことゝ云ふと人の物をとつたり、法律違反の行をしたり、不德義な言語擧動のあることを云ふ。九時がなつて寢床に入つて『あゝ今日も一日正しい路を踏んだ』と思

へば夢まごかなる安眠が得られやうが何ぞ不正なことでもしてをればきつとその善後策や、それが知れはすまいかと云ふ恐怖心に驅られて心は悶々の情に堪へないであらう。

なきなぞと人には云ひてやみぬべし
心のことは〻如何答へむ

他人を欺ることは出來ても社會を欺ることは出來ても我良心を欺ることはどうしても出來ない。

一つの虚言を成立なす爲には十の虚言を要す

善後策として考へることはつまり、ごまかし手段である。例へば余は今日かうして一日ずつと机に向つて原稿を書いてゐる。それが本當のことなのに翌日友人に向つて『昨日は寶塚に行つて一日遊びました』と欺いたとすればそれを本當らしく思はせる爲には何時頃宅を出たか、電車は野田で乘換へたか梅田で乘換

へたか。客は大勢だつたかさほどにもなかつたか、餘興場のピアノに人が居たか居なかつたか、家族温泉に入つたか普通のに入つたか、圖書閲覽室に入つたか入らなかつたか、湯は一度入つたか二度入つたか、それとも三度入つたか、電鐵部の誰かに遇つたか遇はなかつたか、少女オペラへは行つたか行かなかつたか、誰ぞ知人に遇つたか遇はなかつたか、晝食には食堂に行つたかどうか、行つたとすれば何を命じたか、ビールは飲んだか飲まなかつたか、歸りは何時頃であつたか、と云ふ風の多くの無から有を生じなければならぬから、よい加減につばめの合ふやうに又嘘を製造しなければならない。實に嘘と云ふものは厄介千萬なものだ。若し『昨日はどうお暮しでした』と聞かれた時率直に『イヤもうずつと宅にゐました』と云へばしまひである。そこで在宅の模樣のことなことを言ふ必要があれば事實は在るのだからその在るまゝを言ひ並べるのは何の苦もないことである。嘘程損なものは無いと云ふことが此でわからう。

泥坊が稻荷さんに願をかけて『ごうぞ澤山お金が盗めますやうに、盗んでも知れませんやうに』と祈つたとする。神樣は『耳が風ひく』と云つて『くしやみ』をしてゐられることであらう。

心だにまことの道にかなひなば
祈らずとても神や守らん

天道は正に組するものである。石川五右工門を祭つた宮があつても泥坊の保護神にはならぬであらう。

正直は一生の寶なり

とも云ふ。世は黑闇となつても正直ばかりは光明赫々たるもので一時無實の罪を負うことはあつても時節が來れば青天白日聊も曇りない身となることが出來る。商ひと屏風は直ぐでは立たぬと云ふ日本の俚諺に反して西洋には

正直は最善の商略なり

と云ふ諺がある。大抵のことは西洋風の嫌な人でも此ばかりは向ふに圍扇をあげやう。

ものゝふの矢帆の渡し近くとも
急がばまはれ瀨多のからはし

目的の頂點がよし近くとも三角形の斜邊はやめて正直な二邊を辿るが策戰の最よろしきを得たるものである。

勇氣

戰場に立つて勇氣のないものは到底勝利者となることは出來ない。砲聲一發早や顏は蒼ざめ、劍光一閃早や廻れ右をしてゐるやうなことでは勝利者としての名譽の月桂冠は到底得られない。生の巷の戰も亦同じである。尤勇氣々々と云つても此にも色々種類がある。寒い寒中に眞裸で棧橋で荷揚けをしてゐる仲

仕も勇氣があるこは云へやう。百萬の衆を率ゐて白晝の廣野に旗鼓堂々の陣を張る此も勇氣である。秦の始皇を一喝して秦聲で歌はしめた藺相如彼も確に勇者である。寒中に素裸で働く勇氣此は血氣の勇こか匹婦の勇こかから元氣こかこなるこ並一通りではいけない大へんな度胸が入る。藺相如の樣な勇氣は沈勇こ云つて度胸だけでは行かぬ思慮が手傳はねばならぬ。我々が養はうこ云ふのは此沈勇である。假にも腕まくりをして鉢卷をしめるやうな血氣の勇はなくてもよろしいが、平素は蟲も殺さぬ程大人しくしてをつてイザこ云ふ時には思ひきり猛進する底の底力の強い沈勇を希望する。思慮なき勇者は作戰なくして戰場に立つやうなもので一時勝利を得ることがあつても持續しない。『ソラ火事だ〳〵』ときいて『せくな〳〵せいては事を仕損じる』こ云つてゐながら『火事はお前のうちぢやがな』こ聞いて『エ、ナナ、ナナ、ナンテ……あゝ來てくれや

あ、火事ぢやい……』こ俄にあわてるやうな底の淺いことでは到底生の戰には參加されない。大抵のことには屈從もすれば隱忍もするが罷り違うて腕をまくれば相手を斃して一生頭のあがらぬめに合はすだけの含蓄のある勇氣でなくてはならぬ。二口目にはガミ〳〵こ威張散らしてゐながら一つ突込まれたらグニヤリこなるやうな勇氣では賴りない。

生れつき臆病なものでも矯正することが出來る

昔武田信玄の家來で大變臆病ものがあつて戰場に出るこブル〳〵こ慄ひ上がつて仕方がなかつた。信玄つく〴〵考へて或日の戰爭に件の兵士を大樹の幹に縛つた……こやがて戰の幕は開かれて矢はビユー〳〵こ飛んで來るわ、あつちこつちで馬の嘶きは聞えるわで縛られた兵士は生きたる心地もなく絕え入るばかり恐れたが身體の自由がきかぬもんだから仕方なしに目をつぶつて覺悟をしてゐるこ不思議に心が落ちついて敵味方の働きぶりがハツキリこ目に映るやうに

なつた。やがて戰はすんで縛は解かれた。そこでホッ〳〵考へるのには『人間度胸さへ据はつてをればいくら矢が飛んできてもそんなに恐しいものではないいくら恐れても中る時は當らうし外れる時は外れやう結局ビク〳〵するだけこつちの損だ』と、それから此兵士の臆病はスッカリ直つて戰ふ毎にいつも拔羣の奮戰をしたと云ふ。此は余が幼い時漢文の先生が近古史談で敎へてくれたことだが大抵の人の臆病は心がけ一つで直すことが出來る。

ほした浴衣が幽靈に見える

と云ふが、こわがればキリのないことである。妖怪變化は科學の理にはあはない。狐がつまむの狸が砂まくのと云ふことは昔なら本當で通つたかも知れぬが、今時の人間は皆迷信だと云つて斥けてゐる。廣い世界で

人間にとつてこわいものは矢張人間である

人間以下の動物では何一つこわいものはない。獅子、虎のやうな猛獸でさへも

人間には一目を置くのである。夜森林を一人で行くことの出來ぬやうな臆病者は先づ此初期の勇氣を養成する必要がある。

度胸又は膽力とはどんなものか、此は夜中に森林を行くよりもつと高尙な勇氣である。世には左程の學識はなくとも度胸一つで樞要の地位に立つて國際的の難問をすら一身に引請けうまく樽俎の間に折衝する人がある。吉田松蔭が言うた語に『相手が恐しいと思つた時には彼奴も亦人並に家庭生活をしてゐる人間だと思へば何でもない』と云つた。此が度胸である。西鄕隆盛が江戸の城あけわたしの時外の者はオヅ〳〵してヒョッと幕府方の伏兵がありはしないかと目かごを尖らしてゐるのに平然として長押の釘かくしの數をよんで居つたと云ふ。此が度胸である。日露開戰中掉尾の大勝を博した日本海々戰の始まる前半日、東鄕大將が艦内を見まはられると各將卒は戰前の休憩をとつて鼾聲雷の如き有樣であつた。それを見て大將は『モウ此度の軍は勝に

きまつた』と云はれたとか。古今の大戰を前に控へながら此だけおちつきはらつた態度がとれるのは即度胸のせいである。

天下茶屋の或家へ晝中强盜がはいつて細君を縛つておいて簞笥のものを荷にしかけた。縛られた細君は柱に凭つたまゝ兼て示し合はしてあつたベルを押した。それをきいた隣の細君は直ぐ交番所へかけつけた。泥坊が荷物を呑負つて出かけたところへ巡査がやつてきてらく〳〵と繩をかけた。此も女としては度胸の据つたやり方である。

同じ泥坊の話だが或俳人の中へ泥坊がはいつた。俳人は机によりながら澄ましたもので

盜人の目にかけらるゝめでたさよ

と云つて見てゐると泥坊は茶釜を盜まうとした。俳人のよこにゐた一人すかさず世間噺に茶釜りん〳〵

度胸もこゝまで行けば堂に達したものである。

幕末の豪商高田屋嘉兵衛は航行中魯艦に見つかつて八方狙撃の的になつた。唯見る黑山のやうな船が小さい我小船のぐるりにずらりと並んで通すまいとし、その銃の先も皆こちらを向けてイザと云へば直ぐズドーンと打つ用意。之を見た彼はあわてず騷がず八方を睨んで『馬鹿ッ』と大喝一聲したので流石の魯人も之に恐れてスゴ〳〵と筒先をすつこめたと云ふ。此も度胸の力である。

寛政の三奇士高山彦九郎諸國巡歷の中途或山路で山賊に遇つた。『金を出せ』と云ふ。だまつてゐる。『出さねばこれだぞ』と白刃を抜いてつきつける。いよ〳〵と云ふ段になると朗々たる音吐山も崩るゝばかりに霹靂一聲『よまいもの奴！』と叱つたので山賊は荒膽をぬかれてジタバタと逃げ去つた。後日其筋の手に囚へられて入牢した時其山賊の追懷噺に『アの時程恐かつた時は後にも先にもない、思ふにあれは世に云ふ天狗であつたに違ひない』と。度胸と云ふものはこ

んなものである。理窟で說明の出來るものではない。度胸は天然の性得にもよらうが又た百練の結果によることもある。唯夫れ人間は自分の命をほり出してかゝつた時には誰だつて强いものである。我身が可愛いと思へばこそ、云ひたいことも得云はずしたいことも得うしないのだ。我身はごうならうと構はぬ氣ならごんな場合に立つてもこわくはない。尤度胸も幾らか理智が食はつていよ〳〵一命をほふり出さねばならない程の大切な場合かごうかを見定めてから据ゑるやうにしなくちやならない。稻田に羣れて穗を啄む雀を追ふのに何の一命を捨てる程の度胸が入らう、ホイと云つて追へばパッと立つ位のものである。それをば『オイ雀オレはモウ度胸を据ゑたぞ、そこをのかぬか』と力むのは影見て吠えつく犬のやうなもので却て滑稽になる。

風蕭々として易水寒し

昔支那春秋戰國の時燕の太子丹は秦の始皇帝に恥かしめられて無念やるかたな

く何とかして此怨を返してやらうと苦心した。丹は元來賢者に禮を厚くして天下の名士で來訪するものは快く之を迎へて食客として優遇した。食客の一人に荊軻と云ふのがあつた。慷慨悲憤の士でまさかの時には役に立ちさうな人であつた　又近頃身を寄せた人で樊於期と云ふのがあつた。元は秦の大將であつたが或事によつてひどく秦王を怨み逃げて燕に來て太子の許に寄居した。丹は窃に荊軻を呼んで意中をあかした。荊軻は深く肯いて『事の成否はわかりませんが、マア私にお任せ下さい、やつて見ませう』と云つた。そして下るなり樊於期の處へ相談に行つた。樊於期は之を聞くと『それは結構』と云ひさま太刀を拔いて自害をした。驚いてわけを問ふ荊軻を顧みて『どうか此首を刎ねて下さい、そして此を土產にあなたが秦に行かれましたならば秦王も心をゆるして目近く對面するでありませう、その時あなたが匕首を懷からだしてグサッ……よろしいか、サア早く〳〵』と云つて聞かぬもんだから氣の毒でしかたがないが彼が

折角命がけの好意を無にするわけにも行かず、乃其首を刎ねて首櫃に收めた。

そこで尙別に督亢と云つて燕で一番肥沃の土地があつた。その土地を詐つて秦に献じやうと云ふので其地圖を持つて副使を一人差添にして愈々燕を出發することになつた。丹以下見送りの人々は此を最後の途出と思つて皆白帽白衣の死裝束であつた。行き逝いて易水まで來た。こゝは秦と燕との境を流れる川でつまり兩國の國境である。こゝで更に訣別の宴を張つた。宴半ばにして荆軻は起つて劍を拔いて舞ひ

風蕭々として易水寒し
壯士一たび去つてまた還らず

と歌つた。一行の中に音樂の上手なものがあつて之に和した。一同惜別の意を表して北と南とへ訣れた。

當時秦國の勢は旭の昇るが如く、海内の列强皆彼の前には屈服したのであるから單身此重任を帶びて使する荆軻は肩に千斤の重荷を負うたよりもまだつらい譯である。愈々秦の朝廷に着いて來意を告げた。督亢の地を献じて長く大王の差配を仰ぐと云ふのだから秦王御機嫌斜めならず、親しく兩使を延見して慇懃の詞をかけさせられるまでなつた。一通寒暖の挨拶が終つて副使國書を讀むの段になつて手わなゝき聲ふるへて左右少しく訝しむ氣はひがし出した。悟られては大變と荆軻は目くばせで副使を叱し『野人禮に習はず群賢星の如くに居列ませられる晴れの座に出て塲おぢがしたと見えまする』とニコヤカに笑つて自分が代つて之を讀み『サア此から督亢の地圖をお目にかけませう』とてツカ〳〵と秦王の前に進み卷物を次々解いて處々説明なぞを加へた。その態度と云ひ言語と云ひ實に立派なものであつたから秦王始め羣臣何れも舌をまいて感心した。地圖が盡きて顯はれたものはなに、尺許りなる白刃。紫閃凛として肌も寒さを覺ゆるきけもの『オヤッ』と驚く秦王目がけて『オノレッ』と云ひさま投げつ

けたが、ねらひがすこし外れて袖にグサと立つた。しまつたと思つた荊軻は早や腰なる一刀に手をかけて居た。左右のものは『アラ〳〵〳〵』と驚くばかりで刀を持たぬ身のごうすることも出來ず上を下へと騒いで居た。秦王座を起つて逃げて奥殿に行けば荊軻も後を追うて奥殿に入り柱のぐるりを舞ひ〳〵してゐた。其中家來も太刀をとりに行つて戻り秦王も佩ぶるところの長刀を脊にまはして前に拔いて之に當りやうやく荊軻は縛についた。秦王は飛んでもない恐しい目にあつたが併荊軻の沈勇には深く感心したと云ふ。此は史記列傳中任俠の部にあつて余が幼時最好んで傾聽した話である。吾々は日々の生戰に於て荊軻のやうな沈勇があるならば決しておぢけもしくじりもなからうと思ふ。

意氣地なし

親から產んで貰つた身體髮膚が立派に有るものは假にも他に賴らうなど思はぬ

がよい。人間相當の年齡に達したならば男子でも女子でも自助獨立の覺悟が無くてはならない。いつまでも親の臑かぢりをしてブラッイてゐるのは意氣地なしの骨頂である。此も勇氣の足りない人間の中にはいらう。

御無心もの其一

どこにでもよくある、御無心ものが著者の處にやつてくる。其中の一人に丹波國多紀郡笹山の瓦町で小林某と云ふものがあつた。不在中にやつて來て『是非お目にかゝりたいから歸られる時刻を云うてくれい』と云ふ。下宿の主人は何とも思はず『只今新に入營する人があつて見送りに行かれたのですから十一時頃にはお歸りでせう』と云つたものだから、宅へ歸つて晝飯を食つてると其男がやつて來た。一向覺えのない人だがとにかくと云つて通して見ると年齡二十三四才、肉落ちて顏ずゝ黑く頭髮蓬の如く手足蒔繪の如くと云ふまづ普通の零

落振を發揮してゐた。だん〳〵身の上話をする。『大阪に居つても思はしくないから國へ歸らうと思ひます』と云ふ。『國へ歸れば身内のものでもあるのか』イヽエ一人の伯父がありますけれどもそれと喧嘩して出たのですから歸つたところが世話はしてくれまいと思ひます』『それぢや君は何か國へ歸れば此々と云ふ確な職でもあるのかい』『イヽエそれも別に』『ないと云ふのかネ』『へヽ、ヘヽ』それぢや大阪に居るも故郷に居るも同じぢやないか、大阪ならどんなものでもソレ相應の仕事もあるが國へ歸れば何も思はしいことはなからうと思ふ。ソンナ汽車賃があるなら君それをもとでに屑屋でもし給へ、廣みでする仕事だチットモ恥かしいとはない、方々へ無心に行くよりその方が幾ら氣がきいてゐるかわからない。身味の伯父ですらもかばつてくれない世の中に縁もゆかりも無い僕等がお世話しさうな筈がないではないか。僕だつてヤッと此頃になつてどうにかかうにかやつてゐる位のもので、成功した同郷人をたよると云ふんなら僕な

んか以上のお歴々方がいくらもある筈だから其方へ行けばよし、何かよい思案はないかと云ふんならそりや自分の頭で考へられるだけのことは考へてあげるがネ』『どうぞ…何ぞよいことがございますまいか』『サアよいことゝ云ふのは今も話したやうに國でも大阪でも同じ獨りボッチなら歸ることはよして一生懸命働くに限るネ。一体君金はいくら持つてる』『恥しいことですが七錢五厘あるだけです。五錢で電車に乘つて梅田までは行けますが後の汽車賃や晝飯代がありませんので……』『ヨシわかつてる、それぢや僕も少しだが五十錢あげやう、スルト五十貳錢五厘になる。こゝを出て此町のはづれの角目にうどんやがある、アスコの盛りが此邊で一番大きいさうだ、アレへ這入つてチャンと五錢出してうどんを二杯喰へば一寸腹は出來る。それでこんどは殘りの四十七錢五厘を持つて紙屑を買ひながら〇〇町の方へ行き給へ、そこの〇丁目にかう〳〵した家がある、矢張僕と同郡で心やすくしてゐる。その人は別にお金は澤山持つてゐる

ないがそれでも五十錢やそこらはくれるだらう。よしくれないまでもそこの親戚に襤褸の問屋をしてゐるからそこの世話で集めた紙屑を買つて貰つてそれで今日はごこかの木賃で泊る。明日も明後日も當分は外に欲を出さずにそればかり一心に働けば一年も立つ中には少々の餘裕も出來る。出來たら第一着に身のまはりを今少し小ざつぱりし給へ、すれば又ごこかに手蔓を求めて商店の小僧になつて勉強するさ。見れば屈竟な年頃なのに、國へ歸りたいから汽車賃を惠んで下さいなんてそんな意氣地のないことを云つたつて誰も同情するものはないぞ』つて云ふと『有がたうございます、そんならさうしませう』『ヨシカね始め紙屑はたまりまへんだつかが云ひにくゝてもいくまい僕ごこに手頃な支那米の袋の古手もある……紙屑も可なりある。サアこれをあげやう、これと五十錢とをあげやう』『イヤごうも何から何まで有難うございました』と云つて歸つたが、其男は果して余の言うた通にしたかごうかは知らないが甚意氣地のない

人間だと思つた。

御無心もの其二

又今一つ例をあげると、それは夏休みのことであつた。妻を國に歸らせて一人でノンキに古本屋あさりをしての歸るさ高津の阪をトボ〳〵ウロ〳〵してゐると二十五六の青年が詰襟を着てトボーンとアーク燈の下に立つてゐる。僕は何氣なく安ものゝ三千相なごをおいてゐる少林寺前の爺さんの顔を見ながらスイ〳〵行かうとすると『モシ〳〵』とその男が云ふ。『ハァ』『つかぬことをお尋ねしますが此邊に松下鐵工所はございますまいか』つてきくから『一向知りませんな。全体此邊は寺町ですからソンナ工場なんかありませんがネ』何でも高津さんの近くだと聞きましたが』『さうですかこの向ふに一つ小さい工場がありますけれど、アリヤ、確セルロイドだつたと思ひます。何なら此邊の店を出して

る人にきいて御覽』と云つてサッサと行かうとすると『モシ〳〵』つてまだ何か云ひかけた。『變な奴だな』と思つてると『實は私は職業がなくて迷つてるものですが』と前置してそろ〳〵身の上噺になつて來た。涙脆い僕は直ぐ相手に同情しかけた。生まれは東京で父在世の時は可なり資財もあつたのが早く亡くなつて繼母が隨分無茶な人で其意に反して無理から早稻田に入つて理工科を卒業して大阪電燈の方へ雇はれる約束でやつて來たところが、ごうした行違か大電の方ではモウ一ケ月しないと缺員は生じないと云ふ。それで止むを得ず新聞の募集廣告を見て上本町八丁目の〇〇〇社の編輯において貰ふことにしたところがあまり健全な社でないらしく其上正式に傭はれる爲には五十圓も保證金を積まなければならないのでそれもやめました。さうかうする中、今宮の方に苦學生の爲に無料で下宿をさせ又就職の世話をするところがあると聞きましてそれへ參りますと成程世話はしてやるが一應早稻田の方へ照會する必要もあるし君

の履歴を取次がなくてはならずいくら無料と云つても四十五錢だけは出さねばならぬ。其代りには四十五錢出せば職にありつく迄こゝで寢ごまりをして後で勘定はすればよいとのことに自分の財布をあけて見ますと恥しいことには二十錢程しかありません。あと二十五錢ないばつかりに今夜は公園かごこかで露宿をしなければならないと思ひつゝも、若やごなたか慈善の方がありましたら一時拜借をしたいと思ひまして……』『それぢやあ前の松下鐵工所を尋ねて來られたのはごうしたんです』『實は嘘を申しましたので、始めから通りすがりで斯樣な入りくんだことも申し難いもんですから』『全く無いんだネ』『ごうも濟みませんイヤ濟むも濟まぬも無いが、それぢや君は本年早稻田の理工科を出られたのですナ』『ハァ』『只今理工科の部長は誰です』『×××先生です』『君と同期で大阪にかう〳〵した人がある筈ですが』『イヤ一向存じません、そんなお名前も聞いたことはありません』。(僕は出鱈目な名を云うて確めた後)金は古本を買ふ

ぐく少々懐にあつたから四十五錢を惠んでやるこ、幾度もく〳〵お禮を云つて訣れたが、其男はどうして僕の宅を知つたのか又々翌日の夕方やつて來て昨夜來の顚末を述べて愈々西區川口の〇〇鐵工所へ傭はれることになつてそこの職工部屋で寢泊りすることになつたが困つたときはモウ五十錢なくてはそこの賄ひの御馳走になるわけに行きませんので甚御親切に甘へるやうですが又御無心にあがりましたこ云つてこんごは繼母の今やつてゐる藝者屋の町名番地屋號まで言うて東京に御越しになることもありましたならば是非寄つて下さい、私の名は〇〇こ申しましてまだ下に弟も妹もをります。モシ少々でも餘裕が出來ましたらば必らず御返濟に參りますこ云ふから乘りかけた船だこ思つて又々五十錢を與へた。氣の毒な程厚く禮を述べて立ち去つた其一青年は今どうしてゐることであらう。余は敢てこんな些細な自分の慈善を吹聽するつもりではないが現今の青年に今少し意氣地があつてほしいこ思ふ。『我を救ふものは我なり』

こ云ふ事を念頭に於土にかぢり付迄も自力で以て奮鬪し、自力で以て運命の廣野を開拓するの覺悟がなくてはならないこ思ふばかりに引例をしたのである。

自治獨立

自分一個の生活すらも支へ切れないやうな人間が口を開けば天下こか國家こか人道こか大きなことを言ひさへすりやえらい者のやうに考へてゐるのは實に甚しい矛盾だ。古の明德を天下に明にせんこ欲するものは先づ其國を治め其家を齊へその身を修めたものだ。自己の一身が修まらずして他を云ふのは間違だ。東洋の國民は由來

民は依らしむべし知らしむべからず

こ云ふ政治の主義の下に支配されて來たものだから何でも皆當局次第になつて『何故に』こ反問しない風習がある。近頃議會などでこそ盛に當局の仕打につい

て反問もすれば非難もするが尙一般の人民は『ごうすべきだ』と云ふことは知つてゐても『何が故にそんなことをするか』と云ふ原因を理解してゐない。此國民の子孫たる現時の青年子女は又遺傳的に自治の思想に缺けてゐる。家に在つては親まかせ學校に在つては敎師まかせ社會に出ては人まかせ。ちつとも自分自ら自分のことをやつて行かうと云ふ氣慨がない。辨當は棚に在るものと心得、髮は阿母さんが梳いてくれるものと心得、金はお父さんが出してくれるものと心得、部屋は女中が掃除してくれるものと心得、自分が當然心身を勞してしなければならないことまで人に依賴してゐる。其内たとひ些細な事でも自分の範圍に取入れて辨當なら辨當だけは自分で入れて自分で洗つて自分で始末をすると云ふ風にして行つたならば次第にその責任範圍が擴張し、責任範圍の擴張はやがて名譽の範圍の擴張ともなる譯である。

名譽の存するところ責任も亦之に伴ふ

こは吾等の屢々聞く語であるが之を轉換して

責任の存する所名譽も亦之に伴ふ

こも謂ひ得る譯で、今の青年子女は充分此語を玩味して差當り

自分の辨當支配權
自分の居室支配權

位は自己掌中のものとするやうにつとめなくてはならぬ。さうして一家全班にわたつての支配權が手に入る頃女ならば世帶を任されても大丈夫となつた譯で即嫁ぐべき眞の資格が出來たのである。

生戰の落武者—自殺

近頃の新聞は家出とか、駈落ちとか、行方不明とかはザラに多い故か別に記事にはせなくなつたが自殺となるとまだ珍らしいと思つてか、必出してゐる。出

してゐる新聞社では珍らしいつもりなんだらうが讀んでゐる讀者は格別珍らしいとも何とも思つてゐない。『又か』『又か』と云つてスッと脫かす人はまだ餘ッ程丁寧な部であつて多くの人は『又か』とも云はないのである。

凡そ人間の欲のうち何が痛切と云つても『生きたい』と云ふ生存欲程痛切なものはない。だから今しも死刑場に引かれて行く罪人も目かくしをすれば道の小石一つにでも躓くまいとして生命を貴重するのである。どんな大事なものでも命とすゝる換と言ふことになると命をかばつて品物を手離しするのが人間普通の情である。然るに何事ぞ、我と自らその生を絶つ爲に或は毒をあふり或は首を縊り、或は淺間山に走り或は華嚴の瀑に驅けつけ、其他鐵道往生、ピストル往生、身投往生、切腹往生と聞いてもゾッとするやうな方法を以て自殺をすることは、自躰その人の心が解らぬやうなものであるが、それは吾々生きてゐるものゝ云ふことで死んだ當人に云はせて見れば、こんなつまらぬ世の中に生きてゐて何

が面白からう、それをさも面白さうにウヨ〳〵生きてゐる人の氣が知れぬ。まして面白くなくて毎日愚痴たら〳〵で生きてゐる人の氣は尙更をかしいと云ふかも知れない。

人生觀とはなに？

かうなると人間は何の爲に此世へ來たか、人生は無意味のものか有意味のものかと云ふ大問題が持ち上る。此が即

人生觀問題

で古來賢哲の最心血を注いで解決しやうとして而も今におき滿足な解決の出來ない問題である。著者に云はせれば不遜な申分かは知れないが、それは解らないのがあたり前である。いくら頭のよい哲學者が考へたつて永久わかりつこなしだと思ふ。ナゼカ、人生に居て人生がどんなかと云ふことをしらべるのは

徳利の中に居つて徳利の外形を論ずるやうなもんだ。徳利を外から見てこそハヽア此は粟田燒だとか出石燒だとかも云へる。大きい小さいも云へる、白い青いも云へる、長い短いも云へる。が徳利の中に居るものがどうしてそんなことが云ひ得やう。云ひ得たとすればそれは自分の觸れた部分々々についての感じだけのことである。昔印度に數人の盲があつて象の形はどんなかと聞くと鼻を撫でた盲は『棒のやうだ』と云ひ牙を撫でた盲は『骨のやうだ』と云ひ胴を撫でた盲は『蒲團のやうだ』と云ひ脚を撫でた盲は『柱のやうだ』と云つたとか。之を

群盲一象を撫する

と云つて彼等の言ふところは自分が觸つた部分々々だけの感じに過ぎない。失禮ながら古來賢哲の敎へてくれた『人生觀』なるものも此類で實は『人生一面觀』と云ふもので人生の全體ではないのである。だから人生は到底不可解だとあきらめるより仕方がない。形而上學を專門にしてゐる學者先生は別として吾々一般人としては先づ『人生永へに不可解なり』と言つておく方が確だと思ふ。

人生は面白いか面白くないか、死ねば面白いか面白くないか。人に樣々あつて死人に口なしときてゐるから一つも定說を聞くことは出來ない。唯それ著者一個の人生觀はどんなものかと聞かれたなら余は躊躇なく次の如くに答へやうと思ふ。

人生は萬物が悠久の發展の捷徑たる徑路の一片であると

人間の先祖は猿で猿の前が哺乳類で哺乳類の前がその前がと繰ると一番最初は單細胞動物でその前の前は矢張石である土である泥であると云ふから萬物は絕えず進步しつゝあるものでその進步の先頭に人類がある。幾千萬年の昔から現代に引つゞき幾千萬年の未來が現代から開展して行くその徑路に吾々の生が存在してゐるのである。その徑路の多くをしめ得る人程善生涯を經た人でその徑路の僅かしか埋め得ない人程無價値な生涯を經た人である。此立場からして

消極主義を排して積極主義

をこらうと思ふ。つまらぬ〳〵と愚痴をこぼすより自身の努力によつてつまらぬものでない狀態を産み出すのが人生の眞義だと思ふ。

境遇か？我境愚を作らん

不能の二字は愚人の辭書に在り

と高調したナポレオンのヤリ口で行かうと思ふ。

厭世主義でなくして樂天主義

で暮らしたいと思ふ。自殺なぞ自ら求めて我が生の部分を縮小するのだから最愚だと思ふ。つまらぬ本能の奴隷となつて辷つた轉んだと云ふ快樂主義でなく、いつも前途に希望の光明を認めて失意廢頽の愚をしないで樂しんで自己の職務

に勉勵したいと思ふ。

自己の職務と云へば自分は此でも一個の女子教育家である。教育家―わけても女子の教育家なんて云ふものは世間からは極めて意氣地のないものゝやうに取られるかは知らぬが、此でも一個の安慰は持つてゐるつもりである。假に銀行の重役が一千萬圓の大資金を自由自在に運轉してゐるとすれば其銀行家は大したものだと云はれるに違ひないが吾輩の教へてゐる女學生は何れも良家の令孃ばかりで一家の花として大事がられてゐる寶だから此を一人百萬圓に見積つても決して高くはない。一人が百萬圓なら五十人で五千萬圓である。而も此五千萬圓の寶は余輩が一令の下に右向けと云へば右を向く左向けと云へば左向く、ごちらへでも自由自在意の如くならざるなしで大銀行の經營者に比べて五倍がけの大自由を持つてゐる譯だ。而も此等女學生は生きたる寶で絶えず美しい形と優しい心とで余輩を慰めてくれる。卒業してからも先生々々と崇めて時折に

やさしい消息を寄せてくれる。そして彼等五十人の生徒が他日家庭の人となれば三四人乃至七八人の子女の母となつて曩に自分から受けた智識道德趣味の凡ての感化をその子女に仕込むことなると自分の努力は少くとも二百人以上に擴張される。その二百人の子となり孫となり曾孫となれば八百人三千二百人一萬二千八百人と云ふ多數に感化を與へることになる。更にその子孫に擴まつて世と共に其範圍を廣めて行くことはなか〳〵預金の利子のつくよりは高尚でもあり莫大でもある。人は何と云はうとも自分は女學生を敎へることが大變光榮の至りであり又享樂の極みであると思つてゐる。是ひとり余が思つてゐるばかりでなく天下の女子敎育家は皆かうした精神的の慰安があつてやつてゐることであらうと思ふ。若名利に念があるならば一日も早く斯界を去つて更に恰好の方面に活動すべきであるが、かうした慰安があればこそ心がチヤンとおちついてちつとも悲觀しない。世は樂しいもの人生は光明的なものと信じきつてゐる。

破壞主義てなくして建設主義

我々の祖先が遺してくれた有形無形の財產をばいやが上にも發達させて少しでもよい方へ〳〵と新文明を築いて行くのが吾々の務めである。『慣習に囚はれな』とか『舊文明を一洗せよ』とか言ふ語は聞えのよい音響ではあるが徒に在來の文明をけなしだけに吾々は生まれて來たのではない。（勿論囚はれることは云ふことはどんな場合でも忌むべきことだが）けなすからには何かより以上の考案がついてゐなければならない。此點はよいが此點はどうもこんな風にした方がよいと云ふ穩當な態度を以て世に處して行くやうにしなければならない。

保守主義てなくして進步主義

さりとて同じ河瀨の水車では何等人生の意義はないのであるから絕えず改良刷新を企てねばならない。毎日慣れきつて當り前のやうに思つてゐることでも少

しく批評的に見たならば幾多改良すべき點を發見することであらう。

非社會主義でなくして社會主義

世の中がうるさいなど云うて離羣索居した竹林の七賢人のやうな生活は面白くない。

陋巷に居て獨樂しんだ顏淵すらも學んではならない。潁川の流れに耳を洗つた巢父も採らない。世人皆醉へり我一人さめたりと云つて汨羅の川に身を投げた屈原の如きは大々的禁物である。一生を日野山ですねた鴨長明も不贊成である。人間が此世に生まれたのは何等かの方面に於てちつとでもくだするところがあるやうに努力せんが爲である。社會を棄てることもよくなければ社會に棄てられることもよくない。個人は社會を援け社會は個人を助け持ちつ持たれつ互助依從の法則が實現されてこそ人間生活の眞義全しと謂ふべきである。

利己主義でなくして利他主義

人の爲には毛一本でも損すなど云ふ楊子の敎には贊成することは出來ない。自分は他人の犧牲になり他人は自分の犧牲になる爲に此世へ生まれに來たものだと覺悟して居れば間違はない。どんな利己一遍の人でも徹底的に利己を實行しやうとするならば今の世の中には居れない。金滿家が多くの所得稅や戶數割を拂ふのはまはりまはつて利他ともなつて他人の負擔を自分が脊負つてゐる譯である。高利貸の我利々々亡者と雖も己一身の爲だけを考へてゝは到底人生には處れないものだ。此の立場から自殺者を眺めると實にお氣の毒ながら成つてない。（尤乃木將軍御夫婦の如き立派な死は此處に言ふべき限でない）彼等に主義もへチマもないけれども其傾向を云ふなら消極的であり破壞的であり非社會的である

渡る世間に鬼はなし

棄つる神あれば助くる神あり

と云つてどんな難儀のドン底におちてもソレと事情を打あければ誰だつて自分の手に合ふ範圍の助力はする。ソレをするのが嫌さの無分別であるとすれば彼等は

つまらぬことで負惜しみをする人

である。天國に行つて活動すれば面白からうと思つたとすれば天國は現世よりは一層程度の高い社會であつて、現世ですら滿足に活動することの出來ぬものがうまく手腕を揮ふやうなことは絶對に不可能である。永遠の生の戰に堪へないと思つたとすれば彼等は無心云ひにも劣つた卑怯もので云はゞ人間界に向つて辭職を申出た樣なことになる。まして後人の觀るところによると上述の原因による死はまだ上等な方で中には節季に食ひつめて僅十錢の金の工面にせつぱつまつて首縊りをするのもある。コンナのは最初からボウ鰐にでも生まれて肴屋の店にブラ下ればよかつたのである。又相當立派な家の令嬢にして無分別な戀の爲に喉を突くのもある。此等は生前今少し性の敎育や戀愛の眞義について大家の意見でも聽かせておけばよいのである。又『心中』と云ふものがあつて『末は夫婦』なぞ云つてあてにもならぬ二世三世の契りをして男女互に一時に死ぬる奴がある。近松にでも知らせたらよい劇の種が出來たと悅ぶであらうが双方の父母や身内にして見ればどれ程悲しからう。人間はどうあつても自分から死ぬると云ふことはよくない。自分の爲にもよくない、人道の爲にもよくない、天の道から云つてもよくない。吾等は生きざるべからず、永へに生きざるべからず。活きて戰はざるべからず、戰うて光明の彼岸に達せざるべからず。是我奮鬪敎の常套語である。

死を惜しむも不可

定命も來ぬものを自殺するのもよくないが已に定命が來てゐるものをジタバ

タして『あゝ死にさもな死にさもな』と歎くのも見苦しい次第である。古今名士の臨終の泰然たる有樣をよくしらべて及ばぬまでも立派な息の引きさりやうを心掛けなくてはならない。『日本往生傳』にはさうした記事が澤山出てゐる。故高山樗牛博士も人は常に生死の二大問題について考へよと說いた。徒然草の著者兼好も人間はいつ死んでも構はぬだけに早く自分の生を纏めておけと說いた。併『死』の問題に就いてはまだ〳〵謂ふべき多くがあらう。で若他日機會があつたら宗敎觀のことを述べる時に其事を論じやうと思ふ。

自　信

何物も當てにはならぬ、何人も賴りにはならぬ。何時でも何處でも當てになるのは我一人と覺悟して自分を賴り多いものとなすべく不斷の修養を重ねるがよい。支那戰國の說客張儀は其零落して鄕に歸り衆人の嘲つた時『我舌を見よ、

此舌の健在なる限り余は必ず成功して見せる』と云つたが果せるかな三寸足らずの口舌を以て列國の間に遊說し遂に連衡の盟約を爲さしめた。今も知名の文士は酒食の間空談に『我ペンの動く限り我は餓死する憂なし』なぞ云ふ。三寸の舌一本のペンと雖之を練れば以て生涯の運命を寄托するに足るのである。況してそれ以上遙に優れた樣々の智識藝能を身につけてゐたならば自分は益々信賴すべき自分となることが出來やう。今の世に處して一番の奧の手は『自分自らえらい者になるに限る』と云ふのが余の處世觀である。自分が駄目だと親類の者でもそこに居るかとも云うてくれない。自分が少しえらくなりかけると親類ごころか他人までもチヤホヤと親近してくる。自分さへえらくなれば周圍の關係は期せずしてうまく行く。

さていよ〳〵えらくなつた曉には飽くまで自分を信ずるがよい。えらくもない癖に自分を信じ過ぎると傲慢になつたり剛腹になつたりする。此點に於て吾々

を勵ますものは實に彼のマーデンの書いたブッシング、ツー、ザ、フロントの『アン、アイアン、ウイル』（鐵石心）の一章である。今左に譯して拙き說話に替へやう。

◎五十五歲にしてウオルタースコットは六十萬弗餘の負債があつたが彼は此をミンナ辨濟しやうと決心した。此鐵石心は彼の心身全部に其自信を與へ且つ之を激勵した。一神經、一纖維、皆『此借金は返さなくつちやならないぞ』と云ふ。血は一滴々々に其皷吹を受けて活躍して腦に入り其力がやがて筆を揮ふ原動力となつた。遂に其負債は返された。其日誌にスコットは何と記したか『自分は非常に苦しんだ。そして寢轉んだまま眠つてしまつてモウ眼がさめなけりや可いと思つたことも度々あつたが、併自分は力の續く限り飽く迄此難局を切り拔ける決心である』とある。彼の强烈なる意志は勇往邁進して退くことを知らなかつた。他の機

能は悉く彼の心を去つたかと思はるゝに。

◎午前六時――吾れエドワードアーヴイング誓つて曰ふ『神の御助けを仰いで八時を限りアルファ、ビータの部に屬する總ての語を學び了へんことを』此若き人は己の希臘語辭典へ此句を認めた。後に又彼は書き加へて曰ふには『午前八時――吾れエドワードアーヴイング、神の御惠によりて之を爲し遂げぬ』と。

◎『心を決することの出來る人には何事も不可能のことはない』とミラボーが曰つた。『その事が必要か、それぢや、その通りにしやう』それが唯一成功の秘訣である。

◎選擧雜誌の一記者は云ふ『世の中には三種の人間が居る。曰く「やらう人種」曰く「いやだ人種」曰く「出來ぬ人種」。第一は何をやらしても成功する。第二は何を持つて行つても拒絕する。第三は事毎に失敗する』と。

◎ガリレオの如き人物を科學上の發見をした罪で牢獄に投ぜんか、彼は其檻房中の藁で實驗をしたに違ひない。フユラーの視力を奪ひ去つて盲目にせんか、彼は却て益々心理上の問題を討究して漸次に其驚くべき數學的推算の力を表はし來るのである。

◎バルザックの父は悖の文學三昧を思ひ止まらせやうと云ふので『どうだ、知つてるかお前、文學をやる者は帝王になるか乞食になるか二つに一つだぞ』と云つた。すると彼は『よろしい、それぢや帝王になつて見せませう』と言つた。兩親も呆れはてゝ同人を去る貸二階に入れて打ちやつておいた。十年間彼は貧苦と惡戰したが遂に最後の大勝利を得た。

◎佛國のさる青年士官は室内を行きつ戻りつしながら叫んだ『おれは佛蘭西の元帥になつて見せる、大將軍になつて見せる』と。彼は大指揮官となり遂に元帥ともなつた。

◎『奉行の椅子一つ修繕するのに何だつてその樣に特別に念を入れるのか』と聞かれて大工は答へた『いまに自分で腰かけるやうになつた時心地のいゝ樣にと思つてね』。二三年たつと果して此大工は奉行となつて件の椅子に腰かける身の上となつた。

◎或人が長ピットにこれ〳〵の事業は不可能だと云ふと彼は『ナニ、不可能だと、乃公は不可能だなんて云ふことはテンデ念頭にないわ』と言つた。議會に於ける彼の勢力は實に人間以上で、さしもに誇り高ぶる貴族たちも彼の威勢の前に慴伏した。

◎グラント將軍が起つて北軍の指揮官となるや、南軍は已に其運命の窮まれるを覺つた。そは將軍の偉大なる威力に接する時は宛運命の神に攫まれたるが如き思がしたのである。『進めやリチモンドへ』と彼は口癖であつた。老將軍は不同意の態度を示したけれども寡言鐵膓敗北を知らざ

る彼グラントは毫も其目的を外さずして奮進し遂にリー將軍はアポトマックスに於て矛を倒にして其軍門に降つたのである。

◎ガリンスは『解放者』の第一號に記して曰はく『余は眞面目である。余は曖昧の言を吐かぬ。又人にもそんなことはさせぬ。余は一歩も退かぬ、余が言の聞かれざるうちは』と。かゝる頑强一歩も讓らざる決心にこそガリンス其人を造る所以のものであつたのみならず、又リンカン、グラント其他功名の野に僵れた人々の本質であつた。

此鐵石心は强烈なる自信が根底となつてゐる。

我之を欲す故に我能ふ

といふ强い自信がもとになつてゐる。『イヤ自分のやうなものには到底手に合ひませぬ』と指を咬へる意氣地なしでは出來ることではない。

我自ら侮りて後人之を侮る

自暴自棄となつては何事も出來ない。昔名だいの不精者があつて足袋のコハゼがはづれたけれども懐手した手を出すのが嫌さに通りすがりの人に『一寸足袋のハゼを直して下さらんか』と云ふと『怪しからんことを云ふ』と云つた顔つきで『イヤわたしもこのバッチョ笠の紐を結んでほしいと思つてをつた矢先です』と云つた。不精者と不精者とが出くはした話だが、自ら能はずと限つた人は此不精者同樣である。

同　情

同情は生の戰に於ける赤十字軍である。同じ戰に參加する强者が弱者に對して拂ふべき租稅である。生の沙漠のオアシーズである。社會の個人と個人とを結合するオシ糊である。

昨日は人の身の上も明日は我身にふりかゝる

誰しも『我身がもしあんなめに遇つたならば』と想つて見れば一鞠同情の心の生ぜぬものはなからう。苦勞のしてない人間は駄目だと云ふのは此尊い同情を起す資格が無いからである。齒痛の覺えのない人が齒痛の人を思ひやることが困難なと同じく苦勞のしてない人間は苦勞をしつゝある人間に同情を寄せることは不可能である。けれども人間の經驗はもと限りがあつて誰もみなユーゴーのラ、ミゼラブルの主人公のやうにあらゆる艱難を經驗する譯には行かぬ。そこで各人は學問修養によつて寛容の精神と熱烈なる哀憐とを養はねばならぬ。同情なくとも生戰の勇士としての資格に差支ないと思ふのは誤である。熊谷直實は敦盛を打つのに幾度涙を拭つたかを思へ。人を殺すが武士の能ではない、血あり涙のある上に勇敢に戰ふ武技を持つてゐるのが眞の武士である。だから婦人や老人が電車に乘れば席を讓るがよい。汝に餘財あらば其一錢を路傍の乞食に施せ。若くは驛頭の慈善箱に入れよ。汝に能力あらば婢僕が夙夜の勞を想う

て其一斑を助けよ。汝に餘暇あらば道に迷へる不案内者を導いてその目的地に達せしめよ。汝に荷物なくば坂行く車の後押しをせよ。きまりが悪いとか、人が誰もしないからとか云ふ口實は此際斷じて楯にしては可けない。

情は人の爲ならず

と云つて此等同情の報いは必らず汝に幸福をもたらすに違ひない。

汝に出づるものは汝にかへる

唾を天に向ッて『ペッ』と吐いたならばその唾は又落ちて我身を汚す。惡を以て人に接したならば人も亦惡を以て我に返す。善を以て人に接したならば人も亦善を以て返す。よしや有形の幸福は返らずとも『善いことをした』と云ふ滿足なる感じ、是已に報いの大なるものではないか。自分さへよければ人は奴となれ土となれ、はたは野となれ山となれでは一向人間の妙味はない。生の戰に於ける眞の勇者たらんとする者は敵の兜に手をかけて馬から引き摺り落すだけの勇

力があると共に、弱者病者不遇者に對して之に金品を惠み之を片腕に抱きつて殘りの片腕で奮鬪する位の慈悲が無くてはならない。

人生と修養 終

大正七年三月二十八日印刷
大正七年四月　三　日發行
（定價金五拾五錢）

著作者　三浦圭三
發行者　大阪市東區北久太郎町四丁目十五番地一　岡田菊二郎
印刷者　大阪市東區南本町二丁目三十九番地　澤田要藏

不許複製

發賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋西へ入　岡田文祥堂　電話東三二九八番　振替口座大阪五二二八番

日蓮遺訓研究會編

日蓮聖人の遺訓

菊版半截總布製天金袋幀頗美
ポイント新活字紙數三百廿頁
定價金五拾五錢 郵税金六錢

日蓮聖人は一世の快僧にして胎儁の一大一偉人也、其云ふ處糧々として後世を歴し鏘々として金鐵の聲あり其遺訓や千載不朽洵に亦以て吾人日常修養の箴とし處世の鑑ともなすべし本書は即ち其遺訓を抽て萬人に傳へんとするもの、試に本書一卷を手にして聖人の人格と自信とを解得せば眞乎の自己と自己の使命とを自覺すべけん。然り、宇宙より自然へ、自然より人生へ、而して眞乎の解脱と得度を説けるものは世に只だ本書あるのみ、乞ふ先づ一本を繙いて其内容を見よ矣。

小細香風女史著

家庭裁縫全書

附 袋物、縫付物、押繪、造花、紐結、編物、刺繍

全二册・菊版和裝・印刷鮮明
箱入頗美本・紙數四百頁
定價金壹圓 郵税金八錢

本書は裁縫の獨習書とも云ふべきもので、裁縫に關する一切の事物に就ては細密な圖畫を入れて詳しく説明をしたのみでは無く、更らに廢物利用とも云ふべき端切れや小ぎれの利用法をまで之又た細密に述べてありますから一般の家庭には是非とも一本は備へて頂きたいと共に又御婦人方への御進物用としては誠に此上も無い良書であります。

實益と趣味を兼ねた
實驗秘訣

家庭養鷄法

菊版洋裝全一冊
定價金四拾錢 内地送料金六錢

養鷄は農家の副業のみにあらず又た之れを職業とのみすべきものにもあらず一般家庭に於て苟も一坪以上の空地あれば優に行ふを得べし殊に養鷄には實益に伴ふに云ふべからざる趣味あるに於ておや、即ち斯道に就て多年經驗を積みし著者は其實驗上より得たる秘訣を本書に依つて公開し以て之れが普及を計らんとするものにして何人なりとも本書を繙けば種鷄種卵を購ふ時の注意より良否の鑑別孵化法飼育法卵の多産法疾病治療等凡そ養鷄に關する諸項は盡して殆んど遺憾なく尚副ず

養業鷄のはみ農に家あのら

附錄として家鴨飼養法をも添へたり。

小細香風女史著

小ぎれの細工物

全一冊 菊判 和裝頗美本
定價金五拾錢 郵稅金六錢

適材を適所に用ひよとは誰れしも申すことでございますが、一尺の端きれ、五寸の小ぎれも用ひ方によれば立派に間に合ふことが出來ます、又た色の褪せた襤褸のようなものでありませうとも之れを用ひ方によれば實利品とすることが出來るのであります、即ち本書は裁縫の餘技として之れ等の應用法を示したもので云はゞ一種の廢物利用法とでも申すべきでありませう、其收めた處は袋物の仕方、縫付物の仕方から押繪、造花、紐結び編物、刺繍等に至るまで細密な畫圖を挿み、手を執つてお教へをするように詳しく述べたものであります、之又た家庭必備品として是非一本をお求めの程願ひ升。

三浦圭三先生著

人生と修養

菊判半截全一冊
天金本クロース製美本
紙數三百頁
定價金五拾五錢 郵稅金六錢

從來ありふれたる、修養の書は、大抵しかつめらしい文章で、むつかしく說いたものか、または遠い筆を以て老人の茶話めいた、閑話を並べたものばかりのやうですが、本書は著者一流の平明な文章で日常に適切な事がらばかりを面白く說いたもので、内容は修養書として充分の權威があり形式は小說や講談以上に面白く知らず識らずページが、はかどつて早や濟んだかと思はれる位でありまず其上携帶に便利で電車汽車の中の讀物としても至極好適で皆樣の品位を高めることがあつても人前に出して恥かしく思はれるやうな粗雜な本ではありませぬ。

三浦圭三先生著

大正女子美文

菊判半截全一冊
天金本クロース製美本
紙數三百六十頁
定價金六拾錢 郵送料金六錢

硬すぎては男らしくなり軟らかすぎては品位がおちる女子の美文程むつかしいものはないと申します、本書は女性の心理に充分の理解ある著者が十日に一美句を作り一月に一佳章を作りして積年の錦心繡腸を集めたものでありまして硬軟其中を得苟現代の令嬢令夫人は勿論若い男子の方で能文を志す人の爲にも好い參考となります。

文祥堂編輯

我家の寶

附 毎日惣菜の仕方

定價 金拾八錢
送料 四錢

生涯守られば成らぬ格言を撰び左側に安くてうまい手輕に出來る四季の料理を一日十二種づゝ示した便利重寶で家族全體のものが修養に資し日々知らず〳〵の内に身を治め産を興す料となり　畏れ多くも「勤儉力行の御勅語」の主意に叶ひますから何れの御家庭にも御備へに成るやう希望いたします。

◀高尚にして意匠斬新▶

世評一班

大阪朝日　家庭の重寶器具にして臺處の柱に掛けて日々應用し得る樣作られ其右側には家庭の守るべき最良格言を選び左側には日々の四季料理を示して惣菜料理の全部を配當せり近頃新意匠の高尚優美なる臺處重寶なり

東京讀賣　一日より卅一日に至るの紙を短册形に綴り一葉毎に家庭に關する格言を大書し又四季の惣菜を掲げたり實に調法のもの也

◀家庭の贈品としても好適の重寶▶

修養一ケ年

菊判半截總布製　天金上製裝幀頗美
ポイント新活字　總紙數三百餘頁
定價 金五拾錢 内地送料金六錢

起くれば茲に格言あり、寢ねんとすれば茲に遺訓あり。孔子來り沙翁來り益軒來り杜伯等來る。輕快明美なる筆致を以て一日一日諧謔百出趣味津々として盡きず、以て此等先哲名家の遺訓格言を解説講述し來るは蓋し本書を以て嚆矢となす。されば本書を一讀しつゝ一日より一月に一ケ月より一ケ年に及ぼさば讀者が如何に處世方針を暗示さるゝや言を俟たず、乞ふ一本を備へて自省する所あれ。

元百花園主　九鬼紅州著

洋綴菊判全一册　紙數　二百頁
定價 金五拾錢 内地送料金六錢

誰でも出きる

實驗園藝法

美を愛するは人間の天性なり世に此の天性を滿足せしむるの具は多々あるべしと雖も、最も高尚に最も優雅に、而して心神の慰樂となり又以て保健保養の資とするに足るべきもの蓋し園藝を措て他に求むべからず、即ち本書は此技を説くも極めて切實花卉、果樹、蔬菜の三項に分ち所謂誰にも出來る園藝法として其名に背かざる良書なり是非一般家庭に備へ此技の趣味を味ひ給へ

楓女史著

家庭裁縫の栞

菊判美本 全一冊 賣價 金四拾五錢 送料 金六錢

本書は裁縫に關する一切の事柄をお話し體で親切叮嚀に説きて多くの裁ち方寸法雛形と細密圖畫を挿入れたもの初學の人に親切な先生熟達せる人に最も頼りとなる師友です上欄にある家庭節用は婦人の重寶で趣味と實益に富む良書で御座います、

大阪割烹講習會編

四季家庭料理

菊判美本 全一冊 賣價 金四拾五錢 送料 金六錢

本書は手近の材料で三度の食事に必要な惣菜料理からお献立、一品料理、漬物、お壽司、四季折々の和洋支那の各料理、飲食物の精分其他臺處始末法、家庭の心得などに至る迄最も分り易くお話し體で親切に説明せられた何れの御宅でも必要な御本です、

富佐美花溪著

禮儀と作法

菊判美本 全一冊 賣價 金四拾五錢 送料 金六錢

現代禮節家の意見と教育家の唱導する處を綜合參酌し優美なる品性と崇高なる人格の修養に資すべく興味ある談話體にて詳述し方式作法等は卅餘個の木版細密畫を挿入して説明叮嚀懇切總ふりかな附何人も一讀して了解すべく萬人必讀の寶典たり、

花道研究會編

生花の手引

附 投入盛花水揚秘傳法

菊版和裝全一冊 紙數二百頁 定價 金四拾錢 送料 金六錢

本書は花道研究會にて編纂せる生花の秘傳者にして生稽古初めの心得から眞行草の事、四季の生け方及び投入花、盛花等につき心切なる教授法あり、殊に水揚法については古來よりむつかしいものとせられて居る草木花卉について一々實驗せる方法を掲げたれば花道家は必ず一本を座右にそなへてその利益を受けらるべし、

美文大家 小宮水心先生著

長文短文

美文書翰

ポケット袖珍新形 紙數五百餘頁 賣價 金六拾錢
本クロース金文字天金頗美裝全一冊 送料 金六錢

美文書翰の生命たる風韻と練習上熟達を期せん爲同一の題下に長短二章の文例を示して更に其一、二と區別し數多の作例を掲げて趣味と筆致の向上を得せしめ詞藻尤も風流にして優美なる書簡の練習と共に美的記事文の熟達にも意を用ひたり上欄には錦繡たる綱羅したる美文的書翰詞藻は充滿豐富にして錦上更に紅柳を添ふ、

毛利基顯編述

現代傑作

美文的新書翰

洋裝頗美本 全一冊 定價 金五拾錢 送料 金六錢

生きた手紙は生きた人のを見ればならぬ眞實に書翰文の作法に苦しんで未だに思ふ通りに書けぬ人はいくらもある是を近代より現代の知名大家而も眞實に生きた文章を作つた人々の文章を讀まれば生きた手紙は出來ぬ本書を手にして眞實の手紙を得よ、

孤山　三浦圭三先生著

解說 和歌の手ほどき

四六版　全一冊　裝幀優美　紙數三百七十六頁

定價　金五拾五錢（郵送料金八錢）

尋常五年以上の學力さへあれば誰でも和歌が咏めるやうになるべく委しく親切に說明したものですから此風咏の道に入らうとする方々は是非お讀みになる必要があります

◬本書の特徵

1 文章が易くてなだらかで面白いこと
2 新派舊派の何れにも偏せないこと
2 引例の和歌は代々の秀歌で而も健全な思想を歌つたものかさなくば著者の自咏である
4 從來の類書に倣はず一に心理學的の法則に依據したこと
5 從來の類書のやうに文法などを擧ないで和歌に必要な修辭法を說いたこと
6 各項參考書を指示し終に類書を批判解說して初心の人でも相當上達した人でも其程々につけて得るところがあるやうにしたこと

京都帝國大學文科大學教授　文學博士　新村出先生序　森本謙著

新しい解釋の 徒然草とその口譯

五百頁　全一冊　製本優美雅

定價　金六拾五錢（送料八錢）

註解の精密口譯の斬新評釋の卓絕と著者獨特の整版工夫とによりて自修者絕好の羅針盤たる可し乞ふ愛讀を賜へ

伯爵　土方久元閣下題字
宮內省掌典　宮地嚴夫先生題詠　下田歌子女史題詠
玉置一成　新著

故實と新式 日本婚禮式

和裝優美高雅帙入全二冊　用紙純粹の最上和紙刷　裝幀頗美麗　口繪數葉　挿入木版密畫數十個挿入　總紙數五百卅餘頁

定價金壹圓八拾錢　**特價　金壹圓五拾錢**　內地送料金十二錢

結婚は人生の最大問題なり、輕々しく處決するにあらず、著者は茶道瑞穗流十五代の家元にして典禮專攻の士、其の溢るゝが如き精力と國を思ひ同胞を念ふの至誠は凝りて茲に多年の蘊蓄を傾けて本書漸く成れり

一、上は束帶十二單衣着用の儀式より德利を銚子に代へて行ふ略式に至る迄各々階級に渉りて詳述せられたり

一、現代流行の神前結婚、耶蘇教結婚は我が國古來の式典と共に諸家の流派を稽へ、故實と新式とのあらゆる式典作法を各階級に別ちて內部を極めて詳細に網羅されたり

一、殊に媒人にありては式作法及び心得の如き尤も必要の事に屬し、結婚前後の修養より父母の注意心得等の傍ら繕神修養に重きを置き德性涵養に努め、結婚式を中心として其れに關聯する一切の事柄と共に具さに意を用ひ實益と慰藉を與ふ

一、裝幀の高尙優美にして贈り物とするに適し所說すべて實際に基きて詳說せられ文辭平明解釋要を得て總ふりかな附幾多の精巧なる寫圖を挿入して如何なる人にも直に會得し得るやう叮嚀親切に詳述せられたり

一、右本書は各地著名の書店は勿論◎三越吳服店◎大丸吳服店◎十合吳服店に於ても販賣致居候

大阪府立夕陽丘高等女學校教諭 三浦圭三先生著

大正女子書翰文

全一冊 菊版和裝 印刷鮮明 裝幀優美 紙數三百八十頁

定價 金五拾五錢 郵稅八錢

樋口一葉女子の書簡文以來絶えて久しく其好著を缺いた斯界の爲に是非とも一つ有益な名著を提供致したいと思ひまして私の方では此數年來色々苦心をしました結果今回やつと前記の書物を公に致しました此に就いては色々推奬のことばもございます、けれども餘り我田に水を引くやうなことを申すと失禮かと存じまして左に簡單に要項を擧げておきます、

◆從來の女子書翰文の缺點

一、著者に女性生活の理解がない爲實際に觸れない記事を以て充たされたること

二、甚しく時勢に後れて殆德川時代の用文章其まゝを採つたやうな形式であること

三、ページ數の少い割に値段の高いこと

四、用紙や裝幀の趣味があまりにいやしくて中上流婦人の机上にふさはしからぬこと

五、實用と趣味との何れか一方に偏して其中庸を得ないこと

六、挑發的、非教育的の嫌あること

◆弊店の抱負と本書の特徴

一、著者は多年女子教育に從事し、婦人雜誌に稿を寄せ、婦人の會合に講演し、女性生活に就きては充分の理解ある人たるが上に國文學の造詣至つて深く大阪府立圖書館文學部の藏書は悉く讀破せる人たること

二、材料形式共に現代の色彩をつけて舊に昵まず新に偏らないこと

三、紙數多き割に定價を廉くし殆實費同樣の値段を以て一人も多く婦人に愛せられるやうにと努めたこと

四、實用と趣味との程よき調和を得ること

五、內容には現代婦人に對する教訓として最適切なるものを入れ一面女流の處世訓たり常識教科書たるの實益をも提供せること

31
604

終